

新型コロナ情報 [こちらで読めます](#) >

apital 医療・健康・介護

医療事故調査制度 隠さない姿勢が コロナ禍に発揮する力

有料会員記事 新型コロナウイルス

聞き手 編集委員・辻外記子

2020年10月11日 9時00分

医療の質の向上や事故の再発防止をめざし、医療事故調査制度ができて5年がたつ。どんな変化があり、残された課題は？ 新型コロナウイルス感染症の収束が見通せない今、思うこととは。医療安全に詳しい、名古屋大の長尾能雅教授に話を聞いた。

——制度ができ、医療安全は広まりましたか。

この5年間、真摯(しんし)に死亡事故を報告し、院内調査をしているところがあれば、いっさい報告していないところもあります。二極化が進んでいると感じます。何をもちて報告すべき事故とみなすのか。解釈にもばらつきがある。同じ事例をある病院は事故とし、ある病院は事故としない。遺族側はまず、何がおきたかを知りたいのだと思います。「ミスだったのか、やむをえない出来事だったのか」。そのための調査と考えているでしょう。一方、医療側は、紛争を減らすための調査であってほしいと考える人が多い。同床異夢の要素をはらんだ制度であることも、二極化の原因でしょう。

——報告件数はどの程度が適正なのでしょう。

まず調査すべきは、病院でのエラーの連鎖による人為的な死亡事故と、その可能性が否定できないものと考えています。そのような悲劇を減らすことが、優先されるべき課題だからです。エラーはどこでも、誰にも起きますが、エラーの連鎖は断ち切るこ

とができる。原因と背景を探り、防御策を考え、予算を確保して、組織的な対応を広げていく必要があります。

実際はそれらの数自体、よくわかっていません。約1千床ある名古屋大病院では、過失による死亡事故は1年間に1、2件。この割合を全国のベッド数にあてはめると、過失死だけで全国に年間500～2千件あっておかしくない。まずはこれらをゼロにすることを目標に掲げたらよいと思います。

——今の制度の問題点は？

どんな事例を調査するのか、定義があいまいです。何を調査してよいのか、医療現場にその都度、悩みが生じる。成果もよくわからないため、調査しようという動機がやがて鈍っていきます。絶対に防ぎたい「エラーによる死亡とその可能性が否定できない事例」を対象をしぼったほうがむしろよいと感じています。

エラーによる死亡を調査するとなると、報告書が裁判や紛争に使われることを嫌う医療者が一定数はいます。「責任を追及されるなら協力したくない」という言い方をする医師も多くなります。しかしそれは「免責されなければ隠しますよ」という隠蔽(いんぺい)とのバーターを意味します。倫理的に受け入れられることではないでしょう。

医療事故調査とは、まずは個人の責任論と切り離し、標準的な医療が行われていたのか、なぜそうならなかったのか。外部委員の支援を受け、原因をつきとめることを地道に繰り返す作業です。病院はその結果を遺族に説明します。適切な対応をすれば、争いが長引くことは基本的にはありません。全体像がよく理解されないまま、医療側の警戒感が先行している印象があります。

——ほかに改善すべき点は。

調査手法の標準化です。誰が調査しても同じような結論になるような手法を定める必要があります。ばらついたままだと、調査自体への信頼感も高まっていきません。

さらに、どのような事例から調査するか、という判断の標準化です。「逃げない、隠さない、ごまかさない」と私たちは言い続けていても、いざ予期せぬ死亡が発生すれば、常に悩みが生じます。「どうしてこれが医療事故なのか」「解決の必要性があるのか」と。

今のような状態が続けば、客観的に医療事故を拾い上げる仕組みの構築が必要になってきそうです。

また、現行では第三者機関の医療事故調査・支援センターにほとんど権限がありません。ある程度、病院を信頼する形でスタートした制度ですが、病院の自律が難しいのであれば、センターに一定の監査や指導権限を与えるという議論が浮上してくるでしょう。

——コロナ禍のいま、医療安全をどうみますか。

「感染制御は医療安全の兄であり、姉である」などと私は発言してきました。1990年代に感染制御の体制づくりが進み、医療安全は少し後、99年以降に本格化しました。感染制御の体制をモデルに、参考にしながら発展してきたのです。

今は「感染の一大事」です。感染制御を支えつつ、患者の安全の確保をするのが私たちの役割です。感染と安全の連携の真価が問われていると感じています。

立場上、医療への不満を訴える方を多くみてきました。しかしこの春以降、新型コロナの流行で医療スタッフへのエールが増えました。ありがたいと思う一方、ごごちなさもおぼえました。今までの関係性のうつし鏡だなあと。

医療に不誠実、不透明な印象があれば、国民は医療現場からのメッセージに、半信半疑となるでしょう。逆に、医療者の誠実な患者対応や、事故防止への真摯な取り組みを国民が認めてくれているならば、パンデミックの状況下でも私たちは団結できるでしょう。

医療現場は透明性を保ち、患者に説明を尽くしてきたか。その努力こそが有事の信頼につながり、国力にもなり得る。私たちは今、そのことを改めて学んでいます。(聞き手 編集委員・辻外記子)